

KYOKY

119

特集

公立学校等訪問研究



京都教育大学



<表紙>

『秋の遠足2006』

附属養護学校 高等部 3年 赤堀 龍一

この絵は、平成18年秋の遠足で滋賀県にある「比良げんき村」に行った
ときのものです。

げんき村では自分たちで豚汁を作りました。かまどで火を起こしたり、
料理する様子、かまどのまわりの芝生・樹木の様子などを写真を見ながら
工夫して描きました。高等部の仲間と一緒に楽しく過ごせてよかったです。



(財)大学基準協会
認定マーク

このマークは、大学基準協会
の定める大学基準に適合した
大学が使用できるマークです。

CONTENTS



<表紙> 附属養護学校 高等部3年 赤堀 龍一

特集

- 2 公立学校等訪問研究
実地教育委員会
公立学校等訪問研究担当
榎本 靖士

海外見聞録

- 10 フランスとドイツにおける
エネルギー環境教育の取り組み
社会科学科教授
山本 宏文

留学生の声

- 12 百聞は一見にしかず
平成17年度教員研修留学生
Pham Thuy Trang
(ファム・トゥイー・チャン)

研究余滴

- 13 大仏木簡の釈読
社会科学科教授
和田 萃

京教今昔物語

- 15 大学界隈の移り変わり
理学科教授
松良 俊明

京教学内探訪

- 17 あなたの夢を形に… 応援します
学生課 就職・キャリア支援グループ

附属学校園だより

- 19 心と心の交流
—第4回ベレア小学校への訪問学習を終えて—
附属桃山小学校副校長
川端 建治
- 20 より地域とつながる附属学校に
附属桃山中学校副校長
多羅間拓也
- 21 イチョウの木
附属幼稚園副園長
川端 智江

非常勤講師から

- 22 留学経験がなくても英会話指導をやってみる
英文学科非常勤講師
野澤 元
- 22 「役に立たない」問いを巡る「豊かな時間」
教育学科非常勤講師
森岡 次郎

卒業生の声

- 23 「大学時代の思い出と今」
(株)堀場製作所・自動車計測開発部
Softwareチームリーダー
岡田 薫
- 23 頼りになります！京都教育大学
京都府総合教育センター
研究主事兼指導主事
山本 雅哉

ようこそ大先輩

- 24 慕われるリーダーとしての資質
久故 博睦

読者の皆さまへ・編集後記

- 25 地域連携・広報委員会委員長
武蔵野 實



公立学校等訪問研究

実地教育委員会 公立学校等訪問研究担当 榎本靖士

1. 公立学校等訪問研究の概要

「公立学校等訪問研究」（以降、授業）は、全専攻の1回生を対象に2単位の必修科目として後期水曜日1、2限に平成18年度から新たに開講された実地教育科目です。公立学校や様々な教育関係施設などを6~7ヶ所訪問し、その前後の週で事前・事後教育を行ないます。すなわち、訪問する前に訪問先についての情報を学習し、見学のポイントや疑問や質問をまとめておきます。そして、次週に実際の訪問先に出向き、教育活動を見学し、訪問先の先生方から教育活動に関する話を伺い、場合によっては子どもたちと一緒に活動することもあります。そしてさらに次週に、訪問を振り返って、学びとってきたことをまとめ、テーマを絞って、議論し、教育施設についての理解を深めます。ですので、訪問は隔週で行くことになり、訪問ではない週では、1限に先週の事後教育を、2限に次週の事前教育を行います。

授業は専攻ごとで実施され、各専攻の教員が引率と指導を行ないます。実地教育委員会と各専攻からの教員とで実行委員会を組織し、運営を行ないました。前年度から実行委員会を開催し、様々なことを議論して、準備を進めてきました。教育学専攻ではすでに何年も同様の授業を実施しており、それをモデルとして、そして専攻の実情をふまえて議論しました。訪問先はいずれの専攻も小学校と中学校には必ず訪問することとし、その他は専攻ごとに専攻の特色を考慮して選定しました。編集委員会を立ててテキストを作成し、授業のねらいや授業を進めるために必要な知識だけでなく、訪問に際しての注意事項や事前・事後教育の進め方までまとめました。最終的にはハンドブックとして完成しました。実行委員会の先生方のおかげで、名札やその他の細々としたことまで、きめ細かく準備ができたと思います。笑い話になりますが、現場でのトラブルに備え、各専攻には携帯電話を用意し、引率教員に持ってもらうことにしましたが、初めて携帯電話を手にする先生もいらっしゃいました。始めるにあたっては、大学1回生を教育現場に連れて行くということで、訪問先にご迷惑をおかけするのではと心配されましたが、訪問先の学校や教育施設の方からは概ねよい評価をいただいています。実行委員の先生方をはじめ、引率および指導していただいた先生方の努力の成果だと思えます。

公立学校の訪問先の選定には京都府および京都市教育委員会に多大なご尽力をいただきました。また、訪問を受け入れていただきました公立学校および様々な公的教育施設の関係者の方々には、教員を目指す学生ということでたいへんご丁寧に対応をしていただき、熱心にご指導もしていただきました。この場を借りて、感謝の意を表したいと思います。

本稿では、授業についてもう少し深く説明をし、実際の活動の様子を紹介して、今後の課題と展望を述べることとします。

2. 授業のねらいと特色

京都教育大学では、平成18年度に教育学部をこれまでの教員養成課程と総合科学課程の2専攻から教員養成課程のみとする改組を行いました。これにより、平成18年度入学生から全員が教員を目指して入学し、教員免許を取得して卒業することになります。本学ではさらに2種類の免許を取得することを卒業要件としており、団塊世代の大量退職による教員不足、とくに近畿圏の小学校教員の不足に対応するため、できるだけ多くの学生に専門教科の免許だけでなく、小学校教員免許も取得してもらうことを望んでいます。もう一方では、近年、教員になった後、教育現場に適應できないものが多くなってきています。今一度、大学における教員養成を問い直し、卒業後すぐに教育現場で活躍できる質の高い教員を養成することに大学全教員で取り組まなければなりません。その一歩が本授業ということになります。

これまでは、大学では教職科目を履修し、教育実習に行けば教員免許を取得でき、学校の先生になれると考えられてきました。しかし、本学のように全学生を質の高い教員に育てるためには、体系的に教員養成を行なう必要があります。図は、本学における実地教育科目をまとめたものです。本学ではすでに教員養成に役立つ様々な実地教育科目が準備され、段階的に教員としての力量を育てることに注力してきました。各学年の大きなしげみの中には必修科目が示されており、選択科目のしげみはその学年での履修が勧められている科目です。本授業は、これらの実地教育科目の入門的科目で、これまで生徒としていた学校や教育施設に教員としての視点をもって見学することで、学校および教育現場の理解が深まり、これから大学での教職

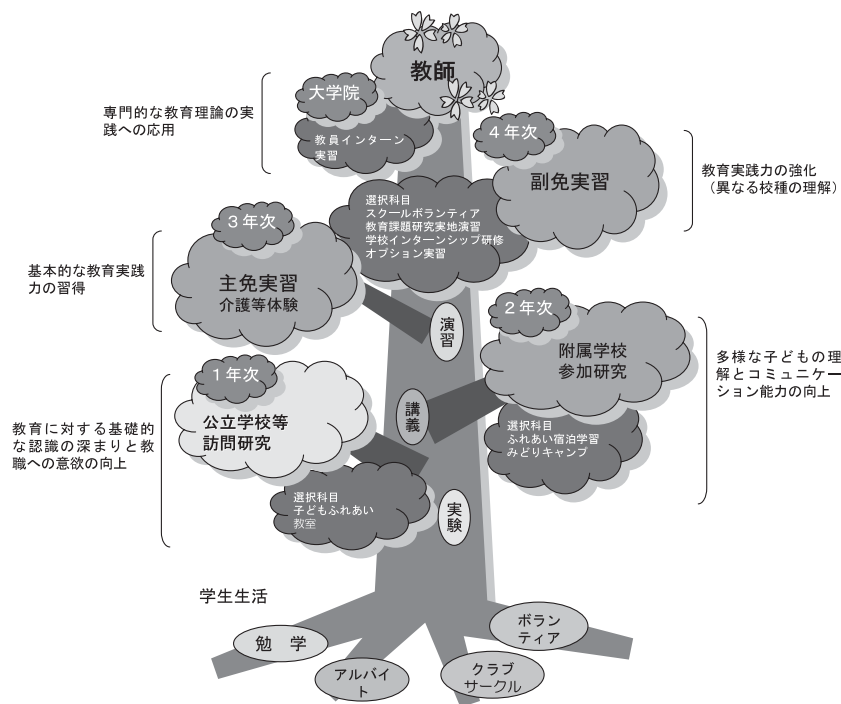


図 京都教育大学 実地教育の樹

科目や専門科目を学習する意識が高まると考えています。

ハンドブックでは以下の3点が主なねらいとして述べられています。

① 教職科目および実地教育科目の理解

- ・公立学校等における教育活動の実際を知るとともに、様々な教育の場があり、また多様な教職員の協働によって教育活動が展開されていることを学ぶ
- ・教職科目をより積極的に学ぶための姿勢を高めるとともに、実地教育を体系的（2回生の学校教育参加研究、3回生の主免実習、4回生の副免実習、その他インターンシップなど）を学ぶ意義を理解する
- ・教員に求められる基礎的心構え、態度、姿勢などを学び、教員をめざす意欲を高める

② 教員という職業の理解

- ・教員の活動とそれに対する子どもの反応、そして、子どもに対する教員の対応の実際を具体的に観察することを通して、個々の教育活動に込められた教育的意図に気づく
- ・授業外の場面における教員の活動や他の教職員との協働の取組を知るとともに、施設や設備、掲示物など学校環境に込められた教育的配慮に気づく

- ・各学校が、地域や子どもたちの実態に応じて目標を設定し、それぞれの教職員の個性や特性を活かして、特色ある教育活動を展開していることを理解する

③ 教科教育の理解

- ・具体的な教科教育の優れた実践を知り、教科専門性を高める意識を持つ
- ・目標にそって、子どもたちに教育内容を理解させるために、指導方法がどのように工夫・改善されているかを理解する
- ・専門教科以外の優れた実践を知り、教育に関する幅広い知識を身につける必要性に気づく

表は、各専攻の訪問先を一覧にしたものです（平成18年6月1日時点のものです。実施においては変更されていることがあります）。すでに述べたとおり、専攻ごとに訪問先を選定しました。学生数の少ない専攻では、他専攻と合同で実施したり、学生数の多い専攻では複数教員で引率するなど工夫されました。また、必ずしも隔週で訪問が実施されているわけではありません。これは訪問先の事情などでうまく日程を調整できなかった場合と意図的に訪問を数回続けている場合とがあります。いずれにしても事前・事後教育は計画的に行なわれますので問題はありませんが、例えば教育学専攻では意図的に複数の教育施設を訪問し、そして事後教育を行なうことで、複数の施設を比較す

ることができ、事後教育が深まると考えています。しかし、全体としては、初めてということで訪問先を選定することで手一杯でしたが、今後は訪問先の順番を考慮することも必要となるでしょう。例えば、小学校を訪問してから中学校を訪問するのと、逆の順で訪問するのでは学校の印象や目に付くポイントがずいぶんと変わってくると考えられます。来年度以降は、訪問する順番や組み合わせなどにももっと工夫をしたいと考えています。

大きな特色の1つに、各専攻の教員が引率・指導を行なった点があげられます。実地教育ではこれまで学生を教育現場に預けて、指導は現場の先生にお任せし、大学教員は間接的な指導を行なうということが大勢だったと思います。引率する教員も実際の様々な教育現場をあらためて知る機会となり、また学生が実地教育を通して変化する様子を見ることができました。引率していただいた先生方からはそのような面でも非常によい授業であると評価をいただいております。まだまだ課題は多いですが、教育大学として発展させていくべき授業と言えるでしょう。

もう1つの特色には、専攻ごとに専攻の特色にそった学校や施設を訪問したことです。例えば、理科領域専攻では「きつぎ光科学館」や「京エコロジーセンター」に、体育領域専攻では「京都市障害者スポーツセンター」や「総合型地域スポーツクラブ（宇治市複合スポーツ少年団）」を訪問しました。専攻ごとに特

色を出しすぎるのも問題があるという指摘もありましたが、訪問した専攻からの意見では、学生の専攻専門科目への取り組みが変わることが期待されるような議論ができたこと報告されています。専攻の専門への興味のみで訪問しては授業のねらいが達成できなくなりますが、専門的な施設においても様々な教育的配慮がなされており、それに気づくことや自分たちの専門的知識が人（子ども）に教えるためにはまだまだ不足していることに気づくには非常によい機会になっていると思います。今後は訪問先の選定にも各専攻の特性が活かされることになりそうです。

3. 授業の様子

次に各専攻からよせられた訪問時の様子を示したいと思います。各専攻の担当教員から寄せられた報告や写真を掲載いたします。まともはありませんが、訪問などでの学生の活動の様子が伝わればと思います。

3.1 全体オリエンテーション

第1回目の授業時（10月4日）の1限目には、全体でオリエンテーションを行ないました。大講堂2に1回生全員を集め、丹後副学長からのお話に引き続き、授業のねらいや訪問時の服装や注意についてテキストを執筆した教員から説明しました。夏休み前にはすでに掲示において、服装や頭髪の注意を行なってきました。その甲斐もあって、全体オリエンテーション時

専攻	学生数	第1回 10月4日	第2回 10月11日	第3回 10月18日	第4回 10月25日	第5回 11月1日	第6回 11月8日	第7回 11月15日	第8回 11月22日	第9回 11月29日	第10回 12月6日	第11回 12月13日	第12回 12月20日	第13回 1月17日	第14回 1月24日
教育学	34	全体オリエンテーション 事前指導①	知的養護 附属養護	府立聾学校	京都市立呉竹総合養護学校	京都市立洛陽中学校 教育相談室	京都市立 洛陽中学校 教育相談室	児童相談所 児童教育センター	児童相談所 児童教育センター	児童相談所 児童教育センター	児童相談所 児童教育センター	児童相談所 児童教育センター	児童相談所 児童教育センター	児童相談所 児童教育センター	児童相談所 児童教育センター
幼児教育	17	全体オリエンテーション 事前指導①	京都市立 山崎小学校 (音楽合同)	京都市立 山崎小学校 (音楽合同)	京都市立 山崎小学校 (音楽合同)	京都市立 山崎小学校 (音楽合同)	京都市立 山崎小学校 (音楽合同)	京都市立 山崎小学校 (音楽合同)	京都市立 山崎小学校 (音楽合同)	京都市立 山崎小学校 (音楽合同)	京都市立 山崎小学校 (音楽合同)	京都市立 山崎小学校 (音楽合同)	京都市立 山崎小学校 (音楽合同)	京都市立 山崎小学校 (音楽合同)	京都市立 山崎小学校 (音楽合同)
発達障害教育	13	全体オリエンテーション 事前指導①	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校
英語領域	24	全体オリエンテーション 事前指導①	宇治市立伊勢田小学校	宇治市立伊勢田小学校	宇治市立伊勢田小学校	宇治市立伊勢田小学校	宇治市立伊勢田小学校	宇治市立伊勢田小学校	宇治市立伊勢田小学校	宇治市立伊勢田小学校	宇治市立伊勢田小学校	宇治市立伊勢田小学校	宇治市立伊勢田小学校	宇治市立伊勢田小学校	宇治市立伊勢田小学校
英語領域	28	全体オリエンテーション 事前指導①	京都市立 西本有造 センター	京都市立 西本有造 センター	京都市立 西本有造 センター	京都市立 西本有造 センター	京都市立 西本有造 センター	京都市立 西本有造 センター	京都市立 西本有造 センター	京都市立 西本有造 センター	京都市立 西本有造 センター	京都市立 西本有造 センター	京都市立 西本有造 センター	京都市立 西本有造 センター	京都市立 西本有造 センター
社会領域	37	全体オリエンテーション 事前指導①	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校
数学領域	31	全体オリエンテーション 事前指導①	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校
理科領域	41	全体オリエンテーション 事前指導①	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校
技術領域	17	全体オリエンテーション 事前指導①	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校
家庭領域	20	全体オリエンテーション 事前指導①	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校
美術領域	32	全体オリエンテーション 事前指導①	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校
音楽領域	16	全体オリエンテーション 事前指導①	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校
体育領域	43	全体オリエンテーション 事前指導①	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校	京都市立 山崎小学校

表 各専攻の訪問先

には大部分の学生が身だしなみを整えていたようでした。全体オリエンテーション終了後、さっそく次週の訪問に備え、各専攻で事前教育を実施しました。

3. 2 訪問先とそこでの活動

家庭領域専攻では、以下のような訪問先とそこでの活動を行ないました。

京都市立西大路小学校では、学校説明と全学年の授業参観に続き、「食教育実践」に関する講話を聴き、給食センターの施設・設備を見学しました。宇治市立宇治小学校では、1年生、4年生および5年生の「算数」の授業を参観し、休み時間に児童とドッジボールなどをしてふれあいました。城陽市立城陽中学校では「家庭科（被服領域）」の授業参観とプールや体育館の見学を行なったのち、教頭先生の講話を聴かせていただきました。京都府立桃山養護学校では、小学部の「音楽」と「からだ（体育）」の授業参観を通し、子どもの個性、能力、障害の状態に応じた指導の実際を学ぶとともに、施設環境面の工夫を観察しました。京都市総合教育センターでは、「教育センターの意義・役割、京都市の研修」についての講話を聴いた後、カリキュラム開発支援センターを見学し、質疑応答を行ないました。京都市こどもみらい館では、「設立の趣旨や子育て支援活動の紹介」についての講話を聴いた後、こども元気ランド、子育て図書館などを見学しました。その後、併設されているもえぎ幼稚園で、園長先生からの保育の内容や特色などに関する講話を聴いた後、保育室、絵本室、園庭、屋上プールなどを見学し、質疑応答を行ないました。毎回ほぼ全員参加で、事前に各自が施設に関する情報収集を行ない、観察の視点や質問項目を準備しました。その結果、教師の視点で授業や施設の見学を行なうことができ、見学後の質疑応答も時間が足りないほど活発に行なうことがで

きました。（家庭領域専攻 後藤）

国語領域専攻では、小・中・高に加えて、盲学校、教育センター、府立図書館を訪問しました。訪問した学生たちの多くが、生徒から教師へという視点の転換の新鮮さについて言及しました。これまでの生徒の立場からみた「先生」ではなく、「職業としての教師」、「職場としての学校」というものを考えるための非常により分岐点になったと思います。引率者としては、立ち歩きもみられるクラスから、特別にプログラムされた探求コースまで、公立学校といいながらもそこには幅広いレベル、多様な現状があるということを経験させられたことが有意義でした。（国語領域専攻 日比）

この授業の中で、学生たちは「教員をめざす学生」という観点から、様々な話をうかがい、さまざまなことを目にして、それぞれに収穫をえてくれました。教室での先生の発問や声かけの仕方、教室の中の掲示物の工夫、子どもたちの様子。そして何よりも、教育のプロとしての教員の姿を通して、教育という仕事の大変さとやりがいの大きさを感じてくれたようです。（社会領域専攻 平石）

3. 3 訪問時の流れと学生の様子

数学領域専攻が城陽市立寺田小学校に訪問したときの様子を示します。

- 9:00 駅集合（忌引き以外30名全員、時間までに到着）
- 9:10 学校到着（スクールサポート加配の先生の誘導）
- 9:15～9:45 校長先生による学校概要説明（30数年前の数学科の大先輩でした）
- 9:45～10:30 教頭先生による施設見学（全ての教室を開放していただきました）



10:30~10:45 中間休みの自由遊び(すぐ子どもと戯れる学生も・・・)

10:45~11:30 1、4、6年生の算数科の授業公開、3グループに分かれて参観

特に1年生の授業はよかったです、補助の先生のようにしゃがみ込み、子どもの学習を見守る学生も何名か・・・

11:30~12:00 教務主任の先生による「学齢期の児童の発達と理解」説明

各学年の発達段階、小1プロブレムや特別支援教育などの教育課題について端的に説明していただきました。最後の締めは、教師になっても資質向上のための勉強は続くとのことでした。

12:00~12:15 質疑応答

5名の学生が質問。個に応じた指導とは具体的に?茶髪指導はどうしているのか?朝学習・読書の取り組みは?水曜だけ時間割が違うのはなぜか?近頃の子どもがもつ夢とは具体的に?

学生たちは、はじめ緊張の面持ちでしたが、子どもたちと接することでみるみるうちに顔がほころび、意欲的に参加しようとする態度に変わっていきました。この変容は実地ならではのものであり、大学での講義ではなかなか起こりえないことです。(教育総合実践センター 松村)

3.4 公立学校以外への訪問

京都市総合教育センターに社会領域専攻が訪問したとき(12月20日)の写真を紹介します。京都市総合教育センターには多くの専攻の訪問をお引き受けいただき、教員になったあとも続く主体的な学びの必要性や、各学校で積み上げられてきた実践の成果物にふれることができました。

体育領域専攻は、宇治市複合スポーツ少年団に12月16日土曜日に訪問しました。水曜日では地域のスポーツ活動が行なわれていないため、例外的に土曜日に実施することになりました。





3. 5 事前・事後教育の様子

事前・事後教育にも各専攻で工夫を凝らしていただきました。基本的には、事前教育では訪問先からご提供いただいた資料をもとに、事後教育では学生のレポートをもとに実施しました。ここでは、特徴的な取り組みとして理科領域専攻の事前・事後教育の概要を紹介いたします。

理科領域専攻は、学生を6、7人ずつの6班に学生を分け、6カ所の訪問先ごとに担当班を設定しました。担当班は“事前教育－訪問－事後教育”の1連の活動を統括し、運営することとしました。これは、全員が

積極的に関わり、活動を通して実りある成果を得るには「事前、事後にどのような活動をするべきか」、「訪問先ではどのような視点が必要か」などを考え、その方法を工夫させることにより、単に与えられた活動を受動的に行うだけでは得られない“訪問活動を計画する”という教育効果をねらったものです。また、これは将来、教員となった場合に必要な全体を把握する視点や活動計画を立てる能力を養うことも視野に入れています。ただし、まだ1回生であることも配慮し、適宜、担当教員が助言するようにしました。

事前教育では、担当班により調査された訪問先の

諸情報（歴史、教育方針、施設から交通手段に及ぶ全て）の報告の後、訪問先において考えられる活動の観点について班ごとに考え発表させ、担当班の司会で担当教員も含めた全体討論を行いました。また、訪問の意図が発散したり、成果が似通ったものになることを避けるために、出された活動の観点（例えば、子どもの活動、教員の活動、学校の施設の工夫や運営方針、地域との連携など）を各班に1つずつ割り当て、事後教育においてその成果を中心に報告させることにしました。これらの活動は、学生に訪問における明確な目的意識を与え、より積極的な活動を促すとともに、訪問レポートや事後教育を充実したものにしました。

事後教育では、訪問を通して班ごと（＝観点ごと）に調べてきた事柄の発表と質疑応答を行った後、担当班の司会で担当教員も交えた全体討論及びまとめを行い、最後に担当教員による講評を行いました。発表では、担当教員の予想を超える鋭い視点や観察結果がいくつも報告され、また全体討論では未熟な部分を残しながらも、学生間で意見の相違による活発な討論も見受けられました。その積極的な姿勢は、担当教員に今後の成長を期待させるものでした。

3. 6 授業の振り返り

すべての訪問が終了したのち、各専攻で全体の振り返りをまとめていただきました。学生には全体を振り返ってのレポートを作成させ、各専攻でご担当いただいた教員には指導に当たっての反省点や問題点をまとめていただきました。これについては、今後報告書の形でホームページや印刷物として公表される予定になっています。そちらをご参照いただければと思います。

担当教員からよせられた意見では、概ね以下のような成果をお伺いしています。①訪問や児童とのふれあいに積極的に参加していた、②生徒の視点から教員の視点への転換がなされた、③教職への意欲が高まった、④校種の選択や小学校志望の確認ができた、などです。問題点も多く指摘されていますが、得られた成果と比べると今後十分に対応していけるものだと考えられます。

社会領域専攻では、すでに学生の振り返りレポートを冊子としてまとめられています。学生の教職への出発点として、貴重な経験となったようです。



4. 今後の課題と展望

まだ十分に授業が総括されていない段階ですが、簡単に授業を振り返ってみたいと思います。実地教育を十分に理解していない私が取りまとめをすることになり、このことが最も大きな反省点だろうと思っています。しかし、多くの先生がたの支援を受け、初年度の授業を実施できたことは誇りに思いますし、大学にとっても大きな財産になったことと思います。17年度の後期から準備を進めました。京都府および京都市教育委員会には、こちらの要望をお伝えして、いろいろとご配慮をいただき、訪問先を選定していただきました。またテキスト編集ではさまざまな大学の実地教育に関する資料を参考に、また1回生が読める内容にとどめると言うことにも配慮して、シンプルで最小限の情報がまとめられたハンドブックとして発行することができました。これらの準備を振り返ると非効率的なことも多々ありましたが、概ね必要なことは準備できていたと思います。今後は、より効率的な運営を目指し、専攻の指導体制と専攻を越えた支援体制をより強固にしていくことが必要となるでしょう。

これからさらに多くの反省が出てくると思います。現時点で把握している問題点としては以下のことがあげられます。①専攻の特色を出しつつ授業のねらいが達成できる訪問先の選定、②訪問先の順序や事前・事後教育を含めた全体の計画性、③学生の受講意欲を高めるための授業実施体制の改善（成績評価法の検討やティーチングアシスタントの活用など）、④学生ばかりでなく担当教員に対する支援体制の確立、⑤長期的な授業効果の評価（今年度受講生の主免実習、副免実習、さらには教員としての活躍まで追跡調査を行なう）などがあげられています。まだまだ不十分なところがありますが、今後さらに発展する可能性も残しています。本授業は、教育大学にとって非常に重要な、核となる取り組みの1つであると言えるでしょう。

授業を実施するにあたり京都府および京都市教育委員会や訪問を受け入れていただいた学校および教育施設の方々には多大なご協力をいただきました。多くの関係者から高い評価をいただき、初年度として授業運営を成功することができたと思っています。これも授業実施における各専攻の教員と事務職員のご尽力の賜物です。さらに、本稿の執筆にあたり、ご協力いただいた教員、事務員、京都府および京都市の学校および教育関係施設の方々にお礼を申し上げます。ありがとうございました。



フランスとドイツにおける エネルギー環境教育の取り組み

社会科学科教授 山下 宏文

持続可能な社会のあり方をめぐる論議が盛んであるが、それに伴って「エネルギー問題」への対応が大きな課題となって注目されるようになった。化石燃料の限界は確実に見えてきた。その中で日本は、現在の生活を維持するために、今後もエネルギー資源を使い続けなければならない。しかし、エネルギー自給率が4%といった現状を踏まえれば、これからの展望は極めて心許ない。さらに、地球温暖化防止に向けた取り組みも危急の課題であり、エネルギー問題への対応は、まさに現実の社会に突きつけられた重い課題である。

こうしたことから、教育におけるエネルギー環境教育への取り組みが要請されている。そこで、この数年、欧米諸国ではエネルギー環境教育をどのように行っているのかを知るために、現地調査を行ってきた。今回は、その中からエネルギー環境教育に熱心に取り組んでいる二つの国、フランスとドイツの取り組みについて紹介したいと思う。

2005年の10月、フランスの教育省を訪れた。フランスのエネルギー環境教育の取り組みについて話を聞き、そのあり方について討議するためである。こちらとしては、それほど大げさな会合を考えていなかったのだが、フランス教育省からは、学校教育局長、視学総括官（地理歴史担当）、教育改革・評価部長（エネルギー教育担当）、国際課長に加え、科学教育、エネルギー教育の担当官及び渉外担当官の総勢7名の方が出席して下さった（写真1）。これだけでも、フランスのエネルギー環境教育に対する積極的な姿勢が伝わってきた。3時間半におよぶ会合の結果、フランス

のエネルギー環境教育のあらましが明らかになった。

フランスでは、社会における課題が学校教育へも大きく反映するようになっており、エネルギーの問題は、持続可能な社会の実現に向けた政策とも直接かかわっているため、重要な問題として位置づいている。そのため、教育課程におけるエネルギー環境教育の体系化を図ろうとしている。中学校理科のカリキュラムは2005年に改訂されたが、その中で、五つの総合テーマの学習を必修化した。五つの総合テーマの第一は「エネルギー」である。この学習は、社会的な側面も含めてまさに総合的に展開することが求められている。高等学校では、エネルギー問題を地理的かつ政治的に認識できるようにすることが重要であるとのことであった。

2006年の11月には、フランス北西部ノルマンディー地方のシェルブール近郊にあるブリケベック小学校を訪れた。小学校第5学年（最終学年）の児童たちが、エネルギーについて調べ、まとめたものを発表してくれた。ラ・アーグという再処理施設への見学から学習を始め、再処理のしくみ、さまざまなエネルギー資源の現状や課題についてまとめていた（写真2）。こうした学習が、フランスの小学校では普通に行われているそうである。子どもたちに、「エネルギーの学習は楽しいか」と聞いたところ、即座に「ウイ」という返事が返ってきた。

フランスでは、その他、ラスパイユ技術高等専門学校、ラ・アーグの再処理施設、科学産業館や科学博物館などでエネルギー環境教育についての取り組みを見



写真1 フランス教育省での会合の様子



写真2 まとめを発表するブリケベック小学校の児童

たり聞いたりしてきたが、それぞれにおいて「エネルギー」にかかわる教育を重視していることが実感できた。

2006年の11月、ドイツのデュッセルドルフにあるノルトラインヴェストファーレン（NRW）州の教育省を訪れた。エネルギー環境教育の担当官から NRW 州の方針を聞くためである。ドイツでは、早くから環境教育に熱心に取り組んできているが、1980年代頃から、「エネルギー問題」の重要性を認識するようになり、環境教育のひとつの柱として位置づけるようになった。問題解決力や判断力といった現在求められる学力の向上を図るためにも、持続可能な社会の実現のためにもエネルギー環境教育は極めて重要なものとして位置づけているとのことであった。

デュッセルドルフ市は、環境課が中心となって50/50プロジェクトという取り組みを行っている。50/50プロジェクトは、各学校に省エネを行ってもらい、そこで実現した省エネの金額の半分以上を学校に戻すという取り組みである。学校における省エネ活動は、エネルギー環境教育への取り組みと一体のものとして行われることになる。デュッセルドルフ市の学校でこのプロジェクトに参加しているのは、約半数だそうだ。

プリンクマンシュトラッセ幼稚園もこのプロジェクトに加わっている。デュッセルドルフ市は、プロジェクトに参加している学校にエネルギー環境教育のコーディネーターを派遣しているが、この幼稚園も派遣されたコーディネーターとともにエネルギー環境教育に取り組んでいた。停電体験をしたり、室温や照明の点灯の無駄をなくすような取り組みをしたりするなどして、園児たちが自然に省エネに取り組めるようにうながしていた（写真3）。

シヨル兄妹ギムナジウム（中等学校）は、早くから環境教育や開発教育に取り組んできたが、ここも50/50プロジェクトに参加しエネルギー環境教育に



写真3 プリンクマンシュトラッセ幼稚園の教室内部
（いろいろな表示がしてある）

も熱心である。学年ごとに取り組みを積み上げるようになっており、最初は、劇化などを取り入れて生徒の関心を高めることから出発する。高学年になると自分たちでテーマを設定し、自分たちで調査・研究することを重視する。実際に生徒が研究成果の一部を発表してくれた。学校全体の電気の使用状況を時間と場所の点から調査し、どのようなところで無駄な電気が使われているかを明らかにし、節電の具体的な方法を提示した研究、蛍光灯に「スターター」の器具をつけることによって、どのくらいの節電が図れるかなどを調査した研究（写真4）など、生徒が主体的に取り組み、実際の省エネ実践に結びつく研究成果を披露してくれた。ドイツでは、その他、総合制の中等学校、エネルギー環境教育を行うための施設、エネルギー環境教育を支援するいくつかのNPO団体、そして地元の電力企業などを訪問した。ドイツのエネルギー環境教育の特徴は、関係機関との連携を積極的に進め、具体的な省エネ実践に結びつけることを目指しているということがよく分かった。

こうしたフランスやドイツのエネルギー環境教育の取り組みを見てくると、日本ももっと積極的に進めないといけないという想いがさらに強くなってくる。



写真4 蛍光灯のスターターについて発表する
シヨル兄妹ギムナジウムの生徒

百聞は一見にしかず

平成17年度教員研修留学生

Pham Thuy Trang

(ファム・トゥイー・チャン)

ベトナムで日本語を勉強していたといっても日本へ来られるとは私は一度も考えませんでした。けれども、奇跡が起きました… 2005年10月3日、日本に行くことになりました。留学するのは初めてです。

幸せことに、1年半、日本に滞在しているところは、日本の一番きれいな1212年の伝統を持っている京都です。初めて雪と紅葉と桜を見たところも京都です。自分を自然に親しくさせるのは京都の景色のおかげです。

最初の6ヶ月は京都大学で日本語の勉強ため、向島学生センターから出町柳駅の近くにある大学を通っていました。京都大学で知り合えた友達は、日本人がいませんでした。なぜなら、国際センターでは外国人留学生ばかりだったからです。各国から来ているので、出身国の話を聞かせてもらっていると、旅行しているような感じがしました。

また、学生センターから大学までは、時間が大変かかりましたが、毎日、京阪線を使って通学していたので、駅のパンフレットや車内の広告などによって、京都の見所の情報を豊富に集めることができたので、暇があれば、京都市内のあちこちに行っていました。自分の目で日本の代表的な伝統文化と新しい文化や芸術・学問が混ざっている京都を見ることができ、深く感じることもできました。神社、お寺と年中行事の祭りが多い町として長い歴史を持っていることが、他の都市と違う京都をもたらしたと思います。一度、京都に来たら、誰でもが京都の魅力

と静けさにひきこまれるはずでした。

2006年4月から、京都教育大学で専門の勉強し、京都教育大学国際交流会館に住めることになったおかげで、日本人の友達をつくることができたので、日本人の風習と考え方をさらに理解できるようになりました。以前、日本の色々なことを勉強したけど、体験するのは大きな意味を持つことだと思います。その他にも、大学の寮に住んでいる外国人の友達と一緒に食事をしたり話をしたりする度に、どんな国籍を持っている人々でも共通点をたくさん持っていると感じました。大学の見学旅行や交流会などを通じて、友達がたくさんできて、周りの人々の生き方と考え方から色々勉強させていただき、自分が段々大きくなってきました。学校の勉強の他に社会勉強も大切なことだと分かりました。



まもなく、帰国日が近づきます。日本のことを知れば知るほど食い意地の張った人のように全部早く身に付けたいです。自分の国と日本の共通点、違うところを知ると、日本のことについて持つ興味がますます大きくなってきます。日本に住んでいる時間を将来の生活と勉強の経験にします。先生方と友達のこと… 我慢できない寒い日々溢れる日当たりの自分の部屋と金木犀の香りが漂う寮に続く道を忘れられません。ずっと…

大仏木簡の釈読

社会科学科教授 和田 萃

「和田さん、太安万呂おおのやすまろと書いてある木簡もっかんが出土した！」

1988年（昭和63）1月下旬のこと、たまたま家で仕事をしていると、昼過ぎに東大寺大仏殿西方の発掘現場から、電話がかかってきた。声の主は、樫考研かしこうけん（奈良県立樫原考古学研究所の略称）の中井一夫さん。中井さんの声が上擦っている。それもそのはず、太（多）安万呂（『古事記』の序文には、太朝臣安萬侶と記す）と言え、和銅5年（712）正月28日に献上された『古事記』の筆録者。1979年1月に、奈良市田原町このせ此瀬から太朝臣安萬侶の墓誌が発見され、全国的に大きく報道された。それを記憶している人々がまだ多かったから、木簡にその名がみえるとなると、人々の耳目を集め、大きなニュースになると判断された。

それで仕事を切り上げ、早速に奈良に向かった。4時過ぎに現場に到着。早速に釈読に取りかかろうとしたが、出土遺物の整理を行なう事務所はまだ未完成で、電気の配線もされていない。そんな状況だったので、懐中電灯を照らしながら、木簡の文字を追った。

奈良時代の遺構は、地表から約13メートル下で検出された。大仏殿の西回廊から西方の戒壇院にかけての一带は、なだらかな丘陵が広がる、古都奈良に相応しい趣きのある所。よく鹿を見かける。当初、遺構が存在するとは考えられていなかった。

東大寺では、この場所に休息所を設ける計画を立案され、それで樫考研が発掘することになった。発掘が始まると、自然の丘陵ではなく、鎌倉時代に重源上人が大仏を再興された時に、廃棄物を埋め立てた場所であることが判明、さらにその下層には、奈良時代の大仏鑄造や大仏殿建立の際の廃棄物の堆積していることが予測できるようになった。

その時点で中井さんが下した判断は、後世に語り伝えられるものだった。予算の枠と発掘の日限からすれば、奈良時代の層にまで達しない。それで中井さんは、自らパワーシャベルを操作して、平安時代の層までを掘り上げ、それから竹ベラで奈良時代の遺構面の精査に取りかかった。そしてかつての谷筋に当たる場所で、木簡が出土したのである。中井さんの的確な判断がなければ、以下に述べる大発見は無かっただろう。

こうした経緯があったので、木簡発見の時点では、

整理事務所は未完成だったのである。懐中電灯を照らしながらの作業であったが、文字は波太安万呂はたであった。「太」の上に、薄く「波」の字を読み取ることが出来る。波太という姓で、安万呂という名の人物である。残念ながら、『古事記』を筆録した太安万呂ではなかった。余談であるが、私は奈良県磯城郡田原本町の出身。田原本中学校3年生の折の同じクラスに、多忠記君ただふみがいた。現在、多君は、太朝臣安萬侶ゆかりの多神社の宮司である。安萬侶から数えて52代目の直系の子孫。大和では、こうした話が時折ある。

私は『古事記』『日本書紀』などの史料や、地中から出土する木簡を釈読し、その内容の歴史的背景を考察する古代史研究者。よく考古学研究者と間違われるが、そうではない。しかし考古学にも関心をもつ。大学1、2回生の折には、京大考古学研究会に所属し、古墳の踏査や発掘に参加した。またここ35年来、樫考研の所員でもある。樫考研には常勤の所員のほかに、私のような非常勤所員が60名ほどいる。全くの無報酬で、報告書をいただくにすぎない。全国でもまことに珍しい研究組織だろう。そうしたこともあって、古代史研究者でありながら、発掘調査現場をよく訪ねる。また奈良県下の最新の考古学情報がいち早く入ってくるので、古代史研究と考古学研究的接点を埋めようと努めている。

さて東大寺の発掘現場では、「波太安万呂」と記した第1号木簡に続き、その後、陸続りくぞくとして木簡が出土した。最終的には226点を数える。これほど多数の木簡が出土するとは、正直なところ予想もしなかった。これらの木簡群を大仏木簡と称しているが、全て私一人で釈読した。振り返ると、大学院へ進学した1967年から、恩師である岸俊男先生（当時、京都大学文学部助教授）の指導のもとに、飛鳥京跡、藤原宮跡、大和郡山市の稗田遺跡ひえだ、唐招提寺講堂地下などから出土した木簡を釈読してきた。先生は、1987年1月に、樫考研第3代所長在任中に逝去された。したがって大仏木簡は、私一人で釈読した最初の木簡になる。そうした意味でも、思い出深い木簡である。

大仏木簡以後、東大寺南大門に近い三社池、興福寺境内、藤原京跡など、樫考研の発掘現場から出土した木簡を一人で読んできた。少し前に古代史の鶴見泰寿氏が樫考研に入所されたので、二人で釈読するようになり、負担が随分と軽減され、まことに有難い。それ

でも10年前から、徳島市の観音寺遺跡出土の木簡釈読を依頼され、これまでに200点近くを一人で読んでいる。日本最古の論語木簡や昨年には漢籍木簡が出土し、大きく報道された。地方出土の木簡としては、質・量ともに日本最大の規模となっている。

木簡の釈読はまことに難しい。完全な形で出土する木簡は少なく、ほとんど折れたり、廃棄された際には半裁されている。また永年土中にあつたために、墨痕が薄くなったり、表面が腐蝕しているものも多い。文字も、一部しか残っていない場合が大半である。だから木簡を最初目にした際、どういう文字なのか、全く見当がつかないことも、しばしば。目が慣れてくると、すぐに読める場合もあれば、1、2週間たつても読めないこともある。

しかし木簡の釈読作業はまことに楽しい。一日中、作業することも、しばしばある。周りから、「疲れませんか」とよく聞かれるが、そんなことは全くない。幸い今日に至るまで、眼鏡を必要としない。裸眼で木簡を見、手もとの『五體字類』を繰り、ノートに記帳できるので、疲労度が少ないのだろう。

永年にわたる作業経験から、ようやく最近になって自信をもって木簡を釈読できるようになった。それは筆順を追うことに尽きる。様々の方向から光を木簡に当てる。また水を張ったバットの中から木簡を取り出し、少しずつ表面を乾かしながら、木簡の角度を変え、筆順を追う。字画の欠けた部分を想像しながら、全体の筆順を追ってゆく。そうしているとある瞬間に、全てが氷解する。筆順が全てわかったということは、その字が読めたことに他ならない。その時の喜びは筆舌に尽くしがたいものがある。全ての文字を解説すると、次にその内容の解明に取りかかる。各種の史料を、あるいは漢籍を繙きながら、内容の歴史的背景を考察する。これまた時間を要するが、至福の時である。

大仏木簡の特色として、次の諸点をあげうる。①木簡は他の遺跡出土のものと同様に、大きく厚みのあるものが多い。銅鉱石などを入れた大きな袋に括り付けられていたからだろう。②年紀を記すものはないが、内容から分析すると、郷里制が廃止された天平12年(740)から、大仏殿が完成した天平勝宝3年(751)までのものと推定できる。③木簡には、銅の重量を記すものが多い。「白銅」「上吹銅」と記した木簡や、上吹銅11222斤(ほぼ7・6トン)を、光明皇后の皇后宮に請求した木簡もある。④とりわけ注目されるのは、「右四竈三十斤」「五竈七斤」「右二竈一斤投一度」などと記す木簡である。大仏鑄造に際して、鑄型の左(東側)と右(西側)に5基以上の巨大

な炉(竈)を円形に配し、溶解した銅を鑄型に流し込んだ状況がうかがえる。⑤皇后宮所属の薬院や悲田院から、大伴部鳥上と大伴部稻依が大仏鑄造現場に派遣されてきたことを示す木簡があり、鑄造の過程で負傷した人々の治療に当たっていたことが推測される。大仏鑄造は聖武天皇により発願されたが、③を考え合わせると、光明皇后の力が大いに預かっていたことを示している、まことに貴重である。

大仏木簡の示すところは、以上に尽きるが、その後、思いもよらぬ展開があった。木簡とともに出土した溶解炉の破片の分析により、微量の砒素が検出され、山口県美東町の長登銅山(戦後、閉山された)の銅鉱石であることが判明した。長登銅山は、江戸時代に毛利藩の官営銅山であったが、地元では「奈良上り」、すなわち奈良時代に大仏鑄造のための銅鉱石を平城京へ運んだことから、「奈良上り」と称されていたが、後にそれが約まって「長登」となったと伝える。地元の地名伝承の正しいことが実証されたのである。歴史とは、なんと不思議で、奥深いものなのだろう。

さらに事態は展開した。その後、美東町では、長登銅山の大切坑の近くで奈良時代の須恵器の破片が散布するところから、同地の発掘調査を実施したところ、奈良時代の建物群や多数の木簡が出土した。その結果、奈良時代に長登銅山で採掘された銅鉱石が、東大寺に送られ、大仏鑄造に用いられたことが確定した。その発掘現場を訪ね、大切坑を見学したが、まさに感無量だった。これまでの木簡釈読で最も顕著な成果のあった事例であり、研究者冥利に尽きる思い出である。

32年の長きにわたり、教育・研究に専心することができた。これも教職員の方々や学生諸君の御蔭である。この場を借りて、厚く御礼を申し上げます。

大学界隈の移り変わり

理学科教授 松 良 俊 明

私は1977年（昭和52年）4月に本学に赴任しましたので、それから30年も経過してしまいました。大学キャンパスを初めて訪れたとき、住宅や商店の立ち並ぶ地域によくこれだけの緑地が残されているものだと感心したことをはっきり憶えております。その後講堂が建設されたり、F棟講義棟ができたりしましたが、私が過ごしたこの30年間に大学キャンパスの大きな構造的変化はないように思えます。ただ、1年1年少しずつ変化が生じたために認識できていないだけで、10年単位でみたら相当な変化が起きているのかもしれない。一つだけ上げるとすれば、昔は歴史を感じさせる古いレンガ造りの建物が散在していたのに、それらがすっかり姿を消してしまったことでしょうか。なにしろ当地は昔陸軍の軍用地でしたから、様々な用途をもったレンガ造りの建物がちらほら残っていました。

私の専門は生物学（生態学）ですので、そういう方面の人間からみた大学および大学界隈の移り変わりを少し述べたいと思います。本学に来るまで私は長く左京区に下宿していました。それまで伏見区に来たことはほとんどなく、同じ京都であっても町のつくりがずいぶん違うと思いました。おんぼろ軽自動車を運転していた私にとって、京都は狭い道が多いと思っていたのに、伏見にすればそれ以上に狭かつ折れ曲がった道が多く、運転が慣れるまでやや苦勞しました。

大学2回生の秋、私は友人といっしょに自転車で深草まで来たことがあります。所属していたクラブが大学祭に出店する店のメニューの一つにドジョウの天ぷらというのがあり、ドジョウの調達を先輩に命じられてはるばる深草までやってきたのでした。当時、龍谷大学あたりは一面の稲穂が実る水田地帯で、二人して泥を一生懸命すくったけれど、結局一匹もドジョウを捕獲できませんでした。（最終的には大阪府南部で採集できましたが。）

本学に赴任した私の任務は生物学実験の指導でしたので、実験材料を求めて大学周辺に広がる農地によく出かけました。モンシロチョウの卵や幼虫を採集するためキャベツ畑にも足を幾度か運びました。また大学院時代から続けているカマキリ（別名チョウセンカマキリ）の生態研究のため、伏見区のおちこちに見られたセイタカアワダチソウ群落地に、学生諸君と調査にたびたび出かけました。つまり伏見区内には、商店の

密集した市街地もありますが、当時は農地や草原もずいぶん残っていたのでした。しかし、現在では畑や水田や草原はほとんど大学近辺から消滅しました。あれだけはびこっていたセイタカアワダチソウも、今では限られた場所に少し生えているだけです。実は、セイタカアワダチソウはカマキリにとって格好の住処を提供してくれる植物なのです。カマキリは秋にセイタカアワダチソウの莖に産卵します。30年ほど前に学生諸君と調査した数多くのセイタカアワダチソウ群落地も、今では住宅地や大型店、ガソリンスタンドなどが建てられ、昔の面影は全くありません。そもそもセイタカアワダチソウそのものが、放棄水田や更地に侵入し繁茂するパイオニア植物であり、それが生えているということは、その場所は遠からず開発されるということの意味しているのでしょうか。しかし、カマキリに愛着をもつ私には、彼らの住処である平地の草原がこのベースで消滅すれば、早晚カマキリという昆虫も絶滅危惧種になるのではと覚えてならないのです。もちろん草原にすむのはカマキリだけではありません。彼らの餌となるバッタやその他多くの小動物も同時に消滅の憂き目を見ます。平地の草原は、人間が住むのに適した環境ですから、開発されることは仕方のないことかもしれませんが。

本学に赴任した年の夏の夜、大文字の送り火を觀賞するために、私はD棟屋上に昇りました。市内の北部からは見ることでできない「鳥居形」の大文字をそこから見ることでないと学生一人から聞いていたので、楽しみにしておりました。その火は遠くに小さくしか見えなかったのですが、五山の送り火すべてを見ることができた充実感に浸ることができました。真っ暗な屋上には、私がかつて経験したのと同じように、学生たちがあちこちに集まって酒盛りをしていました。確か屋上にはフェンスはなかったように思います。なかにはフェンスのない縁近くを歩く者もいました。もちろん今では安全面を考えてこのようなことはできないと思いますが、解放的というかおおらかというか、適当ないい加減さが当時はあったように思えます。また、大人びたバンカラ風の学生がまだちらほらいた時代でありました。時代の変遷とともに最も大きく変わったのは、人の気質かもしれません。



桜の幹にとまるハラビロカマキリ（大学構内にて）

自然環境が比較的豊かな学内には、オオカマキリ、コカマキリ、ハラビロカマキリの3種類のカマキリ類が生息しています。ハラビロカマキリはその名の通り、緑色のずんぐりしたカマキリです。樹上性のため滅多に目にすることはありませんが、冬場、桜の木の枝先にハラビロカマキリが産んだ卵塊を見つけることができます。



あなたの夢を形に… 応援します

学生課 就職・キャリア支援グループ

平成18年10月より、1号館C棟2階（C6講義室北隣り）に、学生の皆さんのための就職・キャリア支援センターを開設しています。

是非ご利用ください。

就職・キャリア支援センターには、閲覧用就職関係図書・資料、企業等からの求人票、就職情報検索用パソコン等を揃えています。

また、相談ブースを設け、2人の経験豊かな教育委員会OBの先生方が、客員教授として就職相談・指導を行っています。

開設時間は、平日（月～金）の10:30～17:00です。（夏季・冬季休業中及び授業休止に伴い閉館する期間があります。詳しくは掲示等でお知らせします。）



これまでは、学生の就職活動支援のため、学生課内に就職資料コーナーを設け、就職に関連する情報の閲覧やパソコンによるネット検索をしていました。また、就職相談として、大学会館に教員及び企業等への就職に関する相談室を設けていました。

しかし、就職資料コーナーが手狭であること、就職資料コーナーと相談室の場所が離れていること等から、それらを一体化し、学生の皆さんが就職活動に向けて、情報の閲覧や学習を行い、あわせて就職に関する相談もその場でできるような就職活動支援のためのスペースの確保を考え、現在の場所に開設しました。

今後も、学生の皆さんの利用状況、方法等を見ながら、より活用していただける場所へと進化させていきたいと考えています。

積極的に利用して、皆さんのご意見もお聞かせください。

就職・キャリア支援センター利用法

その1 ー 掲示板を見る

就職・キャリア支援センター前の廊下には、大きな掲示板があります。この掲示板には、就職関係セミナーの予定など学内就職関連行事に関する情報や教員・公務員・企業等の採用関連情報が掲示されています。



授業の行き帰りなどに少し立ち止まって、また、時には足を運んで見てください。

きっと有用な情報が得られるでしょう。

その2 ー 求人票・最新情報をチェックする

就職・キャリア支援センターには、求人資料として、企業より送られてきた求人票と会社案内等を閲覧できるようにしています。併せて、公立学校・私立学校の募集案内や公務員募集案内も同様に閲覧できるようになっています。

さらに、求人票や追加募集等の情報は随時追加をしていますので、最新情報もチェックしましょう。

また、企業や公務員に関する就職説明会資料なども置いてあります。様々な求人情報は早めにチェックするようにしましょう。



その3 ー配布資料を見る

就職・キャリア支援センターと学生課には、本学へ送られてきた学生の皆さん向け配布資料を、書架などに置いています。コンビニで立ち読みする感覚で、色々手に取って見てください。必要な資料があれば、遠慮なく持ち帰ってください。

その4 ー参考図書を見る

就職・キャリア支援センターには、就職に関連した各種図書及びビデオ等を備えています。

これらの図書やビデオは基本的に貸し出し可能ですので申し出てください。

その5 ーパソコンで検索する

就職・キャリア支援センターに3台のパソコンを設置しています。本学の就職サイトにアクセスして、求人情報を検索するとよいでしょう。また、インターネットを通して様々な企業等の求人情報やそれに付随する情報を得ることに役立ててください。



その6 ー就職相談

インターネットや資料から得られる情報だけでは、本当に知りたいこと、必要な情報は得にくいこともあります。また企業の情報だけでなく、就職に対する心構えや面接方法なども就職活動をするうえで大きな悩みとなります。このような悩みをもつ学生の皆さんは、ぜひ就職・キャリア支援センターや学生課の窓口で気軽に声をかけてください。

就職・キャリア支援センターでは、月曜～金曜、12時～16時の間、教員としての経験豊富な2人の客員教授が、主として教員就職に関する相談・指導を行っています。また、教員以外の就職相談についても相談にのっています。相談内容によっては学生課で対応することもあります。遠慮なく聞いてください。

悩みはかかえたままではなく、誰かに聞いてもらうことが、解決への近道です。

相談することで、就職活動に有利になる様々な情報を得ることができたり、すっきりした面持ちで就職活動に向かえば、きっと良い結果にもつながるでしょう。

客員教授（就職指導担当）の紹介

平成18年4月から、教員への就職相談・指導を主に担当していただく客員教授2名を迎え、学生からの各種相談、教員採用セミナー等を担当していただいています。



鈴木博詞先生

京都市立小学校校長、京都市教育委員会統括首席指導主事などを歴任



錦川義信先生

京都府立高等学校校長、京都府教育委員会総括人事主事などを歴任

各先生の相談担当日は、毎月相談日カレンダーとして掲示でお知らせしています。

また、相談は、予約制となっています。学生課窓口で予約をしてください。

なお、予約の入っていない時は、随時にも受付けています。

就職を主体的に実現していくのはあくまでも皆さん自身です。決して与えられるものではないということ、を、まずしっかりと心に留めておいてください。

ただ、自分の将来のこととはいえ、何から、どのように手をつけてよいのか分からない人も多いでしょう。そこで、皆さんの就職活動が、適切な考え方と周到な準備のもとで行われ、満足する成果があげられるように、就職・キャリア支援センター、学生課では、年間を通じ様々な就職支援プログラムを計画し実施しています。

皆さんの可能性は限りなく広いわけですが、就職活動においては甘い考えや手抜きが命取りになることもあります。いずれの行事にも意欲的に参加し、思考と準備を積み重ねて行くことが重要です。

- 1・2回生は、夢を育てるために
- 3・4回生は、夢を形にするために

学年にかかわらず就職・キャリア支援センターを有効活用してください。

心と心の交流

—第4回ベレア小学校への訪問学習を終えて—

附属桃山小学校副校長 川 端 建 治

南オーストラリア州アデレードにあるベレア小学校と本校の交流も、今年度で8年目を迎えました。

昨年度は、5月にベレア小学校より32名の子どもたちを迎え、10日間に渡って本校全学年児童との間で、とても豊かな交流が展開されました。

今年度は、本校がベレア小学校を訪問する年でした。8月1日、午後9時45分発の飛行機で関西空港を飛び立った一行40人（児童35人・引率教師5人）は、翌日の午前10時過ぎ、シドニー空港で国内便に乗り継ぎ、午後2時過ぎにアデレード空港に到着しました。

「私たちは、初めとても不安でした。でも、みなさんの優しさ笑顔が、すぐに私たちを元気にしてくれました。」

これは、ベレア小学校との交流の最後に行われた「お別れ会」で、自分たちを支えて下さったベレア小の方々へ、桃小の子どもたちから心を込めて伝えられた挨拶の言葉です。

この言葉は、今回の交流学习の目的がみごとに実現されたことを如実に物語っています。

アデレード空港での出迎えから、学校での歓迎会、教室や廊下でのさまざまな出会いと交流、そして何よりも素晴らしいホストファミリーとの生活等、その一つ一つにおいて、ベレア小の子どもたちやスタッフのみなさんは、いつも溢れるばかりの笑顔と優しい心遣いを、私たちに送ってくれました。

また、桃小の子どもたちも、その笑顔や言葉かけの中に、相手側の思いやりや歓迎の気持ちを敏感に感じ

とっていました。

お互いの中にあつた言葉の壁が、「相手に分かってもらおう」「相手を分かろう」とする気持ちの交流によって、少しずつ取り除かれていく様を、さまざまな場面で共有できたことは、両校の子どもたちにとって、かけがえのない体験であったと思います。その実感が、この挨拶の中に込められていました。

それは、桃小の子どもたちがお別れ会で見せてくれた姿にもあらわれていました。お世話になった全ての方々への感謝の気持ちを表そうということで、お別れ会では日本文化の紹介を兼ねて、みんなが自分の得意技を披露することになっていました。剣玉・おじゃみ・独楽回し・人間車・バレエ・フラフープ・空手・体操等と、さまざまなパフォーマンスが披露されました。場所が狭く、思うようにできない難しさを抱えていたにもかかわらず、子どもたちは、みんなが心をつなげて、お互いの出し物を支え合い、サポートしていました。それは、お世話になった人々に、何とかお礼の気持ちを伝えたいという共通の目的を持った子どもたちだからこそできたことだと思います。

「今回の桃山の子どもたちは、この交流の意味をとてもよく理解していた。」と、ベレア小学校の先生からのお手紙にありました。この言葉は、私たち桃小のスタッフの感想でもありました。

異文化との交流という相互学校訪問の取り組みでは、時には難しい課題も生じてきますが、回を重ねる度に、交流の内容が深くなり、大きな成果が積み上げられています。



両校の子どもたちの共同学習の様子



お別れ会での本校児童のパフォーマンス

より地域とつながる附属学校に

附属桃山中学校副校長 多羅間 拓也

本校は、京都市伏見区桃山井伊掃部東町16番地に所在します。その町名である「井伊掃部（いいかもん）東町」は、言うまでもなく、ここが、かつて伏見城があった頃の、井伊家大名屋敷跡であったことを示し、当時は、井伊掃部頭直弼（いいかもんのかみなおすけ）の先祖である、井伊掃部頭直孝（いいかもんのかみなおたか）の屋敷であったとされています。

ところで、昨年の秋、本校の校門横に、この町名の由来とその後を示す案内プレートが、地域のロータリークラブの寄贈で設置されました。伏見城の井伊家番大名の屋敷跡というだけでなく、その後の桃山高等女学校、女子師範学校とつながる場所だけに、地域の方々が本校にたいして大変深い愛着を感じておられることがよくわかります。その意味で、本校はさらに地域とのつながりを深める努力をしなければと考え、最近さまざまな取り組みを始めています。

昨年度、本校は「地域の国際化に対応する学校づくり」を主題に研究発表会を開催しましたが、その時発表しましたように、本校では放課後に「日本語教室」と「中国語教室」を開設し、地域の中学生の受け入れをしています。また、伏見青少年活動センターや地域の関係団体と協力して、地域で、帰国生徒や在住外国人生徒などの教育に関わる人たちのネットワーク（渡日帰国青少年のための京都連絡会）をつくり、地域に根ざした活発な活動を展開しています。また、本校が、地域における日本語指導者のネットワーク基地になっていることもあって、「日本語教育セミナー」を毎年のように開催しているため、文部科学省の推進するJSLカリキュラムの、地域ばかりではなく、西日本における普及拠点となりつつあります。

上記以外にも、本校が、地域とのつながりを深めるための活動に、「MOS（桃山オープンセミナー）」という公開講座開催があります。この講座は、本校の



校門横の案内プレート

生徒や保護者だけでなく、広く地域の方々にも公開しています。今年度は、食教育シリーズで、第1

回目は、地元にある有名老舗料亭「魚三樓」のご主人に、「子どもたちに伝えていきたい日本の食文化」と題した講演をしていただき、第2回目には、本学家政科の先生から「心と体にやさしい



桃山オープンセミナー



日本語教育セミナー

『おやつ』（間食）について」と題したご講演をいただきました。

そのほかにも、本校が大変交通の便がよい場所に所在しているため、地域における各種研究団体等の協議会場としても利用されており、地域とのつながりを深めています。特に本年度は、伏見子ども支援センターの開催する「伏見本所地域子どもネットワーク連絡会議」を2回にわたって開催し、地域の関係諸団体関係者と「特別支援教育」についての研修の場が持たれました。これを機に、今後本校が、特別支援教育など「子どもたちの育ち」に関わる諸課題についての研修場所として、広く生かされたいと思っています。

なお、地域の方ばかりではなく、さらに多くの方に本校の取り組みを知っていただくため、最近、本校のホームページをリニューアルしました。生徒の多彩な活動をご案内しておりますので、是非ご覧下さい。

本校のホームページをリニューアルしました。
是非ご覧ください。

URL <http://www.kyokyou.ac.jp/MOMOCHU/index.html>

「京都教育大学附属桃山中学校」で検索しても見つかりませんし、「京都教育大学」のホームページからも入ることが出来ます。

イチョウの木

附属幼稚園副園長 川端 智江



園庭のまん中にイチョウの木がそびえています。女子師範学校に通ってられた方々が「イチョウの木が懐かしくて…」と同窓会の帰りに立ち寄られ、記念撮影されたことがありました。そのころから、大きな木だったようで樹齢は10?歳だそうです。

春には小さな葉がいっぱい芽吹きます。イチョウの木の下に入園したばかりの子どもたちが集い、牛乳を飲んだり、絵本を見たりするひとときを過ごします。

夏には大きな木陰ができます。創立百周年を機に金子文子さん(当時の保護者)が作詞された園歌「イチョウの木陰で 輪になって みんなで お話 楽しいな 明るく 育て 附属の子」にあるように、子どもたちだけでなくお迎えにこられた保護者の方々の話も、弾むようです。

秋には、ギンナンの実を割り箸で拾い、新聞紙の上に広げ、種を取り出して、ギンナン用の洗濯機で洗います。園内清掃当番のお母さんの感想文に「ギンナンむきに挑戦したのは、初めての経験でした。すごい臭いとプチッとするむく時の感覚は、いまいけど、苦労した物に対して食べてみたいという好奇心は私も子どもも同じだと思いました。炒っているとポップコーンのように皮が破裂し、中からグリーン透きとおるようなとても美しいつぶができました。香ばしくて、いい香りでした。弾力性があり、もっちりしていて美味しく新鮮でした。」とありました。黄葉してハラハラと風に舞って落ち、園庭に黄色の絨毯を敷いたようになります。熊手を使って落ち葉の山を作ったり、花束やアクセサリを作ったり、ままごとに使ったり、落ち葉は子どもたちの絶好の遊びの材料になります。

冬には、枝だけになってしまいます。てっぺんにハンガーやスズランテープでできたカラスの巣が見つかったこと

もありました。園庭で凧揚げをするとよくひっかかって、子どもたちを困らせます。

新任の加用園長が始業式で「僕の家はあのイチョウの木です」と話されました。子どもたちは「園長先生は本当にあそこに住んでいるのか?」と半信半疑です。そこで園長は、子どもが登園する前にこんもり繁ったイチョウの木に登り、子どもたちが木の下で遊んでいる所に「おはよう」と下りてこられました。「園長先生や!」と大騒ぎ。「今日は園長先生居はるかな?」と毎朝イチョウの木を見上げる姿が見られ、子どもたちの心は大いに揺れ動きました。ところが、今年はギンナンの成り年で枝が柳のように垂れ下がり、風の強い日にミシミシ、ドシンと折れてしまいました。子どもの居る時に折れては大変と剪定したら、形のいいイチョウの木になったのですが、園長先生の家が無い事が分かってしまいました。ツリーハウスをぜひ造ってみたいと思っています。

イチョウの木はすっかり園生活に溶け込んでいます。創立120周年の同窓会誌に小・中学生から「幼稚園の思い出」を寄せてもらいました。「私は幼稚園のイチョウの木が大好きでした。イチョウの周りでリレーをしたり、ギンナンを拾ったからです」「イチョウの木の下でお弁当を食べたことです。風が気持ちいい時は、葉がひらひらしてとてもきれいでした」「太いイチョウの木、初めて園に行った日からずっといっしょでした」「イチョウの葉っぱをいっぱい集めて、みんなといっしょにお店屋さんをしたのが楽しかった」「ギンナン拾いが楽しかった。見たらオレンジ色で、触ったらぶよぶよ、においがかいだらくさかった」など、イチョウのことがいっぱい書かれていました。



イチョウちゃん



園庭のまん中にイチョウの木がそびえています。女子師範学校に通ってられた方々が「イチョウの木が懐かしくて…」と同窓会の帰りに立ち寄られ、記念撮影されたことがありました。そのころから、大きな木だったようで樹齢は10?歳だそうです。



ギンナンちゃん

留学経験がなくても英会話指導をやってみる

英文学科非常勤講師 野澤 元

去年の四月から一回生の「英語コミュニケーション」で、会話の授業をさせてもらっています。私は英会話の指導をするのは初めてで、また、留学経験のない私にとって、会話の授業にはかなり躊躇がありました。もちろん、英会話であればネイティブの先生の方が適任でしょうし、会話以外のコミュニケーションを課題とした授業にするという選択肢もありました。しかし、小学校からの英語教育についても議論される今日、日本語話者の教員でも会話を指導する必要性は高まっていますし、そのための技法の開発も重要な課題です。また、ネイティブにも日本語話者にも、それぞれの良さのある英会話の授業というものがあるはずだと考えたわけです。

入学試験を乗り越えてきた学生達は、基本的な英語の文法や語彙の力を持っています。ですから、英会話テキストに出てくる表現について読解したり作文することは、比較的たやすいことでしょう。しかし、彼らにとってそれらを耳で理解し、口から表現することは、決して簡単なことではありません。理解や表現どころか、短い一文を暗唱することすらままならないものです。目と手による英語に慣れた彼らに、耳と口による英語を体感してもらい、その感覚を身に付けてもらう、それが第一の目標です。

毎回、テキストの対話を中心にして、表現の解説、聞き取り、発話練習、実践という流れで授業は進みます。発話練習や実践は最も重要ですが、かつて同じ学生立場であった自分自身の経験から言っても、なかなか積極的に取り組んでもらえない課題です。普通は、発話練習であれば、教員の手本に続いて気のない復唱を数回するだけですし、実践でも、形式的なロールプレーを何度かやるだけで終わってしまうことになりがちです。ですから、これらの課題は全てゲーム形式にすることにしています。発話練習では流暢に言えるまで個人で練習してもらい、最後にクラスを二組に分けて暗唱リレーをします。実践では、ロールプレーの対話に選択肢を用意しておいて、結果は運次第ですが、5回のロールプレーのうちで経験した選択肢の多さを競います。こうすれば、相手から返答を求める意図を持って話しかけ、その返答を聞き取ろうと努力します。どちらの課題でも、勝者にはちょっとしたお菓子の賞品があります。

授業を一番楽しんでいるのは恐らく私でしょうが、学生達も楽しんで取り組んでいるようで、動機付けの点では悪くはないと思っています。逆に、学習効率の点ではやや疑問もあり、難しいところです。毎回試行錯誤が続きます。

「役に立たない」問いを巡る「豊かな時間」

教育学科非常勤講師 森岡次郎

学生たちは、どのような動機を持って私の講義を受講していたのだろう。

教員採用試験を受験するとき、もしくは、教師となって子どもたちと接する（授業を行う）ときに「役に立つ」知識を得るために、大学の講義を受講する。教師を志す教育大学生としてはごく当然の動機である。もちろん、教師を志しているわけではなく、卒業必要単位だから受講している学生も、なかには居るだろう。それでも、やはり大半の学生は、自分が教師となってから（なるために）「役に立つ」知識を得るために、朝早くからの私の講義に、律儀に出席してくれていたのではないかと。

しかし、ひとたび「役に立つ」とは何か？と考え始めると、その答えを探すのはかなり難しい。教員採用試験の問題の解き方を教える（たとえばキーワードを暗記してもらう）ことが「役に立つ」授業なのか。もしくは、子どもとの関わりにおいて「～の場合には○〇と対応すればいい」という教育実践の「正解」を提示することが「役に立つ」授業なのか。

おそらく、私はそうした学生の期待には応えることができなかった。

教員採用試験の問題の解き方に関しては、私の講義よりも簡潔、明確に解説しているセミナーや参考書がいくらでもある。また、「道徳教育」や「子どもとの関わり方」に関する「正解」などは、私にはわからないし、おそらくそんなものは存在しない。

重要なのは、大学の教師やテキストからわかりやすく提示された「正解」を鵜呑みにすることではなく、「(道徳)教育」や「人間」に関する事柄には「正解」なんてないかもしれない、と学生自身が考え続けること。「教育」という営みの多様さ、複雑さ、困難さの前に立ち止まり、「正解」のない問いを巡って悩み続けること。

「教育」の問題に限らず、「自分の存在」について、「宇宙の神秘」について、決して答えにたどり着かない（「役に立たない」）問いを巡り、真剣に語り合う。思い返せば気恥ずかしくなるような時間を、大学生でいるうちに、存分に経験してほしいと思う。

小・中学校の教師はとても忙しい。教師になってからは、目の前の仕事に追われ、毎日子どもたちとの「格闘」に追われる日々が（おそらく）待っている。目的一合理的な時間の使い方が重要となる。

しかし、「役に立たない」時間の浪費を存分に許されていることこそが、大学生の醍醐味である。そして、答えのない問いに思いを馳せながら友人たちと語り合う、非目的一非合理的な時間こそが「豊かな時間」となる。私の講義が、学生たちが「豊かな時間」を過ごすためのきっかけ（話題の足がかり）となったなら、これほど嬉しいことはない。

こんな「説教染みた」ことを書くなんて。私も歳をとったなあ。

「大学時代の思い出と今」

(株)堀場製作所・自動車計測開発部 Softwareチームリーダー 岡田 薫
(特修理学科物理学専攻 昭和56年度修了生)

在学時には、寮生活や混声合唱団での練習と結構自由な大学生活を送っていました。

寮生活では体育科や美術科・教育学科の学生達との語らいを通して見方や考え方の幅広さを知りました。大学主催のツアーで(確か美術科の山崎先生から)スキーを教えて頂いてそれから毎年学生向けスキーツアーに行くようになったこと、理学科の先生と学生の一団での白山山登り、夏季特別履修応募で屋久島まで地質調査をかねて行ったこと、などは懐かしい良い思い出になっています。スキーをある程度続ける中で、ボディバランスや練習を通してようやく次のレベルに行けることなどスポーツを行うことの基礎を知った気がします。

混声合唱団では音楽科の喜多村先生から発声法の基礎等を学びました。混声合唱団の課題曲としての古いフランス語楽曲や、日本人作曲の難解な和音の楽曲や、ヨーロッパ宗教の楽曲などの練習を通して、自己の体を楽器そのものとして要求に瞬時に対応できるように補正し100%かそれ以上の力を発揮しようとする対応性と、決して諦めずに何とかやり遂げようと努力する粘りと、何倍かの練習を行いようやく人に聞いてもらえるような状態に持って行く音楽という難しさを知り、また達成感を味わうことが出来ました。混声合唱団では同回生で(教育実践センターの)浅井和行先生・(教育委員会の)古谷一樹先生・(小学校教諭

の)相模光弘先生と知り会えました。

スポーツや音楽の経験はその後生活の幅を持たせることに良い影響となっています。

理学科では川端先生・橋本先生・村田先生・沖花先生に教えて頂き、卒論では沖花先生に指導して頂きました。沖花研究室では小さな放射線物質を用いての実験物理データをコンピュータ計算で処理することを行っていました。私の大学時代のコンピュータは、計算機センターまで行ってFORTRANプログラムを1行ずつ1枚のカードに打ち込みミニコンピュータに読み込ませて結果をプリント出力する形のものでした。実験装置を組上げることも、光電子増倍管や真新しいカウンター装置を用いての実験も好きでしたが、コンピュータプログラミングには面白さを感じました。最小二乗法でのフィッティングカーブを算出する手法は、卒業後今の会社にてプログラミング言語Cに書き変えて、分析計特性を補正することに用いることが出来ました。現在はその会社の開発部署にて、リアルタイムマルチタスクの形での組込みプログラミングや、Javaを用いたパソコン上でのアプリケーションプログラム等を製品用として実現・指導をしています。

メーカーの開発部署では、ジョブ責務も多くてタフネスさが必要ですが、それをこなす精神や体力は大学時代に培ったように感じています。

頼りになります！京都教育大学

京都府総合教育センター 研究主事兼指導主事 山本 雅 哉
(学校教育専攻学校教育専修 平成10年度修了生)

京都府教育委員会から現職派遣され、平成9年度から2年間大学院で学ぶ機会を得ました。

大学卒業後、15年近く障害児教育、人権教育、教育相談、学級経営、教科指導等を中心に幅広く学んできました。学んできたことを自分なりにまとめて、更に深めたいと意気込んで、大学院の講義を受講し研究も手探りながら始めました。すると……。それぞれの講義は私にとって、思ってもみない知的枠組みや新しい知見を知る機会となりました。さらに、大学で研究されている内容という素材を実践する側がしっかりと料理することで学べる機会が多くありました。結果、当初考えていた実践をまとめる計画は、さらに自分の興味や関心が広がることで変更し、新しい知的枠組みや新しい知見に積極的に触れ、新たな気持ちで学ぶことができました。

2年間を振り返ってみると、学んだことは多くありますが、特に、学校というフィールドから物事を見るだけでなく、学校を外から見るという双方向の視点を持つようになったこと。教育活動を「なぜするのか?」「これからどうなっていくのか?」「結果はどう

なるのか?」等とこれまでより多面的で、想像豊かに考えられるようになったこと。この2つの学びは大きな収穫であり、大学院修了後の教育実践を新たな視点で取り組むことができ、現在の仕事を進める上でも大いに役立っています。

キーボードを叩いてインターネットを使つての検索は、ここ数年で飛躍的に便利になり、仕事でも十分活用できるようになりました。しかし、新しい知見や豊かな情報は研究室のドアを叩き、直接、教官に教えて頂くこと、講義で議論することにより、リアルに自分の求めている答えが得られることを実感した私は、今後も京都教育大学を頼りにしながら、実践を積み上げていきたいと思っています。

さらに私が学んでいた頃よりも、今は現職教員向けに講義の時期や時間が配慮され、講座の充実も図られ、シラバスからも教育の課題を共に考えようとする姿勢が伝わってきます。

教員の力量向上に向けて、これからも頼りにしています！京都教育大学。

慕われるリーダーとしての資質

久 故 博 睦

まず自己紹介！今年1月77歳になった。卒業は、昭和25年3月、卒業証書には京都師範学校・京都学芸大学の二つの校名が併記されている。

まず、大学への昇格にかかわる時、一学生であった私の回りの様子を伝えたい。大学に昇格するためには、詳しくは知らないが、設備、人員を始め、いろんな規格に合格しなければならない。文部省から視察にくるといふ半年くらい前から、緊張した雰囲気校内に中流れている事が、私たちにまでひしひしと伝わった。

当時、私は150人くらい居住している紫郊寮（現・附属高校一部）にいた。10月に大学への審査があるという半年くらい前から、毎朝、6時「皆さんお早うございます。今日もお願いにきました」という声が聞こえてくる。声の主は、生物学担当の永友教授。

寮生に早起きして、朝食前に周りの環境整備をしてもらおうという教授の発案から始まったようだ。自由参加であったから、初めは少しは抵抗心もあったであろう、参加者が少なかった。遠くの自宅から自転車に来て、毎朝の呼び掛けの熱意に、徐々に参加者が増え、ほとんど全員の参加となった。草ひき、整地、雑巾がけ、便所掃除、あらゆる出来る事はした。こうして全員で綺麗にしていくと、事後の使用も気をつけるものである。

その他、大学昇格に図書館の整備が大事だといわれ、書架に図書を並べ、索引作りに1か月ほど携わった。今になって作業の過程を振り返ってみると、よくやったものだと思う。永友教授の大学昇格への熱意が寮生を動かしたのである。大学に昇格した一部の裏話かもしれないが、私には一生忘れられぬ出来事である。

さて、前段の文で私の真意ご理解いただけたでしょうか。私は、現在同窓会の監事を引き受けている。同窓会の活動を活発にするためには、広報活動を盛んにする事が第一であるが、「同窓会費の徴収がスムーズにできない」と、会合でいつも言われている。徴収方法にも問題があるだろうが、大学設立時を考えると、もっと我々の地域に密着した学校であるという自覚と誇りを持ってほしいものだ。本学は、平成18年度入学生から、学校教育教員養成課程に一本化されたと聞く。しかし、卒業生の多くで、他の分野で素晴らしい活動をしている方々が多くおられるのも、大きな誇りである。

学校教育の専門家になる事は必要な事であるが、学校教育関係者だけの分野の付き合いだけでは、どうしても視野が狭くなる恐れがある。私自身、教育関係を通じて、マスコミ関係者、美術家、写真家、音楽家等と付き合う事によって、それが教育現場に生かされた事例をたくさん持っている。

高齢化社会になって、周りには昼間は、老人だらけといっても過言でない。その中では、過去の職業なんて関係ない。特に、謙虚で、人の気持ちを考え、気づかう感性の持ち主が必要とされる。しかし、よく考えてみると、この事は、子供にも、どの社会にでも言える事ではなからうか。

第119号の読者の皆さまへ

KYOKYOをお読みいただきありがとうございました。

より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。

広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1番地

京都教育大学企画広報課気付「地域連携・広報委員会」

E-mail: kouhou@kyokyo-u.ac.jp

119号編集後記

広報119号をお届けいたします。特集は「公立学校等訪問研究」です。京都教育大学は今年度から総合科学課程の学生募集を止め、学校教育教員養成課程に一本化しました。まだ総合科学課程の学生の皆さんは勉強中ですので学部から総合科学課程が無くなったわけではありませんが、いっぽうで1回生は全員が学校教育教員養成課程になりましたので、1回生からの教育は大きく様変わりしています。この中で特集として取り上げた「公立学校等訪問研究」の授業は、新たな教員養成教育の典型とひとつとなっています。学校の教員を志望する学生が、公立の学校やさまざまな教育施設・機関を訪問し、その現状をつぶさに観察し、教育のあり方について考えを深めていくことを通して、大学での学びに対して強く動機付けをしてもらうものです。大学の多くの先生方が学生を引率して学校等を訪問していて、実施に深く関わっていることもこの授業の特徴です。つまり大学をあげた全体の取り組みになっています。幸い訪問した学校や教育施設でも大変好評を得ています。教員を目指す学生の実践的な取り組みを知っていただければ幸いです。

なお表紙は附属養護学校の赤堀龍一さんの作品です。おらかな図柄をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長 武蔵野 實



京都教育大学

地域連携・広報委員会

委員長	武蔵野 實				
副委員長	谷口 淳一				
委員	広木 正紀	田中 里志	浅井 和行	樋口 とみ子	
	松井 仁	香川 貴志	村田 利裕	宇野 和樹	
事務担当	企画広報課				



京都教育大学広報 第119号

発行日
2007年3月23日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
<http://www.kyokyo-u.ac.jp>